国　語

（解答番号 1 ～ 22 ）

第一問　次の文章を読んで、後の問い（問1～8）に答えよ。

写真は光学と化学、さらに電子工学という複合的な科学技術の産物である。だがそれだけが写真を成立させているのではない。写真はすぐれて知的道具であると同時に社会的な産物でもある。今日の文明は、そのあらゆる局面において写真抜きで成立するとは誰にも想像できない。写真はそれほど広く深く浸透しており、その力は物質的な存在としての写真だけでなく、記憶や思考といった心の働きにも影響をもっている。写真の複雑性は、物質的な面だけのものではない。

イギリスで写真史の最初に登場する人物のひとりフォックス・トールボットは、フォトグラフィーという言葉より以前に、自らの発明を「フォトジェニック・ドローイング」と呼んだ。わたしはこの「光による描画」という呼び方が、以下のようないくつかの理由によって、今日新しい意味をもって復活してきているように思う。

まず写真はその発展を通じて、光の応用範囲を拡張してきたという歴史がA ある。一九世紀以降の科学技術は、電磁波の研究を通じて、科学的な描画の可能性を拡張してきた。日常的な意味での写真は可視光線の幅で扱われるが、X線を使ったレントゲン写真、赤外線フィルム、レーザー光を使ったホログラム（注1）等々と、これらも広義の光の描画だと言えるだろう。これらには、コピー機やスキャナのように通常「カメラ」とは呼ばれない機械も含まれる。トールボットの「光による描画」には、カメラを使わない、物体の直接的なコンセ（ア）キが含まれていたことを思い出したい。

第二に「描画」は、そこに一定の手続きや操作が含意されているという点である。今日以上のような応用領域を拡張している光のひとつはレーザーだが、3Dスキャナのような機械はまさに二一世紀のフォトジェニック・ドローイングを可能にしていると言えるだろう。物体の形状をレーザー光でケイソ（イ）クし、これを3次元データとして取り出し、これを3D

プリンタで出力する。この一連の過程は3次元のフォトジェニック・ドローイングである。「撮影」できる対象はまだスキャナのサイズによって制限されるが、すでに手持ちのスキャナが開発されていることからも、立体的な撮影記録が日常化すると考えられる。スキャンした物体をデータとして転送し、別の場所で出力することが一般化すれば、物体とイメージの区別は次第になくなってゆくだろう。

もともと人間は立体的な再現に対する強い欲望をもっている。一九世紀後半にはすでにダゲレオタイプ(注2)による「ステレオ写真」（立体写真）が作られたが、これは物理的には存在していない写真の奥行きを見たいという欲望の産物である。その先には3D(注3)ホログラフィーがあり、さらに3D描画から立体を作り出す今日の技術がある。写真史の最初の160年を2D(注4)中心の時代とするならば、現在は写真が3D中心の時代に入っているとも言えるだろう。すでに述べたように、写真がインフラグラム(注5)として今日わたしたちの生活に深く広く浸透しているのも、主に3次元的利用のためにほかならない。

写真と地図製作技術との結びつきによって生まれた、新たなイメージ空間としてのグーグルストリートビューについては、すでに(注6)述べた。いまや地球はもとより、月から他の惑星までをデータ化するのだから、そのデータ量は ① 「天文学的」なものになってゆくだろう。GPSによる位置情報と一体化した写真は、地球上に位置しているというよりは、複製された宇宙モデルの一部ということになる。逐次更新されるという点では時間の次元を加えた、4次元的利用とも言えるだろう。

こうして写真は異なる種類の情報を結びつけ、過去に向けても未来に向けても増殖を続けてゆく記憶の建築物であるとともに、あらゆる種類の映像を取り込みつつ24時間常に編集が続く、雑誌のようでもある。撮影され、印刷され、投影され、スキャンされ、コピーされ、立体化され、平面化され、切られ、貼られ、消され、共有され、保存される。それは物質性を持ちながら、物質性を超えて増殖し、イメージの惑星を形成するスーパーマガジンである。

フォックス・トールボットが南イングランドの片田舎レイコック・アビイの屋敷で実験を重ねていた頃とは、とても比

較できないほど光による描画は発展した。「自然(注7)の鉛筆」は生まれた当時すでに、草花、ガラス瓶、レースといった小さなモノから、納屋、教会、都市といった大きなモノまでを克明に記録できる技術であったが、それからたった180年あまりのうちに、B地球をもうひとつ作り出すほどに成長したのである。

言うまでもなく、これは今日の写真の使用法のほんの一部に過ぎない。医療技術やセキュリティ産業も含め、二一世紀は「光による描画」の爆発的な応用の時代とも言えるだろう。そこでは物体とイメージの二項関係はもはや消えている。物体はイメージの一形態であり、イメージは物体の一形態と言ったほうがよい。あるいは物体としての存在様式と、イメージとしての存在様式が二重化しているのがモノであると言ったほうがいいだろう。このようなモノの持つ性質を「超物質性」と呼びたい。それは文明の夜明けから二一世紀初頭までに人類が生産したデータの総量を、数日分あるいは数時間分、やがて数秒分の総データ量が凌駕(りょうが)する時代に特有の物質観になるだろう。たとえばＩｏＴ(注8)のように常時データ化されているモノがある。データ化されるだけでなく、それが常時接続されて存在するモノの様態は、もはや物質―非物質という二項的なカテゴリーには収まらない。

C超物質性は、モノがある種のプロセスにあることを示している。３Ｄスキャンされたデータそれ自体はモノではない。それはイメージとしての存在様式であり、それは別のモノを生み出すことができる状態でもある。その意味でモノは多元的な様態をもち、またモノは技術を介して、別のモノとの関係性のうちにある。あるモノが作り出されるためには、道具や技術といった別のモノが必要であり、どのモノも他と無関係に存在しえない。その関係は、ふだんは目に見えず、意識されることもないが、何かのきっかけで複雑な関係性の網の目が浮上する。たとえば故障や事故が起きたとき、わたしたちははじめて、それに気がつく。

アートはこのようなモノの特殊な存在様式を顕(あら)わにすることができる。イメージと物質の関係に介入し、それを別の関係へと変換することによって、問いを立てるのである。その究極の問いは、やはり人間についての問いだろう。人間とは

何なのか、なぜイメージを創るのか、生に意味はあるのか、わたしたちはどこへ行くのか……これらの問いは、科学技術がどれほど発展しても、それだけでは答えられないものである。データ化の最大のターゲットは人間である。日々の行動や個人情報から生体情報や遺伝情報まで、徹底的にデータ化される人間は、それでも、もって生まれた身体と感覚をたよりに生きてゆくしかない。このようなデータ化を受け入れて生きる、回線に接続された生活とは、超物質性そのものであり、その意味で人間は二重存在的になるだろう。そしてこの特殊な存在様式が、外から与えられたのではなく、人間の特殊性に由来するものである以上、わたしたちは自分自身で考え、答えを見つけるほかはない。

特に今日、ひときわ痛切な問いは、生の意味である。生命がモノとして、ほぼ無際限に操作され、細胞のレベルで時間の巻き戻しが可能になった現在ほど、生きることの意味が分からなくなってしまった時代はないだろう。D生命のメカニズムが明らかになればなるほど、生命は無意味になってゆく。現代の文明は、生命と意味とを完全に切断し、意味の代わりに無意味を据えることで、取り返しのつかない結果をもたらそうとしているのではないだろうか。

今後も爆発的に進展する科学技術の行く末で、では35年後にわたしたちの社会はどのような状況を招いているだろうか。一九八五年に現在の状況を予想するのが難しかったように、二〇五五年の世界を描くことはできそうにない。そこで『非物質』(注9)展に戻ってみると、展示されていた作品のうち、いまも寸分も変わらず存在しているイメージが、少なくともひとつだけあることに気がつく。それは展覧会の始まるプレリュード(注10)として置かれていた、美しい石のレリーフ(注11)である。

エジプトのカルナック神殿の北から発見されたこのレリーフは、ネクタネボ2世（在位紀元前三六〇―三四三）の時代のもので、現在はフランスのグルノーブル美術館にホカンウされている。女神は片手で優しく王の肩を抱き、もう片方の手を王の口のあたりにかざしている。女神の指は、その体つき同様にセンサイエかつ優美で、その掌（てのひら）から王の鼻先へ向かって、アンク（Ankh 先端に楕円（だえん）のついた十字）と呼ばれる徴（しるし）が浮遊している。神が人間へ向けて、「徴」を与えている瞬間のイメージである。

人間は生命と意味とを受けとった――すなわち魂を。彼らはそれを完璧にし、完全無欠な形で返さなければならない。今日、それがなされるべき何かがあるだろうか？　ここに、本展の最大の賭けがある。

『非物質』展の監修者らがそのボウトウ[オ]においたこの問いに答えられる者は、現在もまだいないと思われる。当時と同じように、いやもしかするとそれ以上に、生命と意味との乖離（かいり）は大きくなっているからである。だが以上のような物質とイメージの状況を考えたうえで、わたしはいま、この問いに別の響きを聞き取ろうとしている。この問いは35年前のものではなく、２０００年以上前のものではないのだろうか。それは永遠の生命を信じ、ミイラをはじめ、物質を超えようとするさまざまな技術を開発した人々の、最後の王朝が終わろうとしていた時代のレリーフである。[E]彼らにとっても、すでに生命と意味との関係は、もはや明らかではなかったかもしれないのだ。

すなわち与えられた魂をどうやって、完全な形で返すことができるのか、分からなくなっていたのかもしれないのである。だからこそ、その「徴」が与えられる瞬間――それはほとんど写真的な瞬間である――を描く必要があったのではないだろうか？

物質に宿る生命とは何か。生命に宿る魂とは何か。そして非物質化文明に残された最終的な問いは、魂を与える神とは何かへ向かうだろう。

（港（みなと）　千尋（ちひろ）『インフラグラム　映像文明の新世紀』による）

（注）１　ホログラム――レーザー光で3次元情報を記録した媒体のこと。
２　ダゲレオタイプ――ルイ・ジャック・マンデ・ダゲールによって発明された世界初の写真撮影法。
３　3Dホログラフィー――ホログラムに3次元情報を記録し、それをもとに3次元映像を再生する技術。

4　2D――2次元を意味する略語。ここでは奥行きのない平面であることを意味する。

5　インフラグラム――インフラストラクチャーとインスタグラムを組み合わせた筆者の造語で、社会生活の基礎としてなくてはならなくなった写真のこと。

6　すでに述べた――出典『インフラグラム　映像文明の新世紀』で述べられている。

7　自然の鉛筆――フォックス・トールボットによる世界初の写真集のタイトル。写真術の革新性を表現した造語。

8　IoT――Internet of Thingsの略。家電などあらゆるものがインターネットに接続されている状況を指す。

9　『非物質』展に戻ってみると――『非物質』展は、一九八五年にパリで開催された展覧会。『非物質』展については、インフラグラムの前史として本文の直前で触れられている。

10　プレリュード――ここでは、展覧会のテーマを前もって知らせる作品を意味する。

11　レリーフ――浮き彫り細工。

問1 傍線部**ア**～**オ**の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の**a**～**d**のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は**ア**が 1 、**イ**が 2 、**ウ**が 3 、**エ**が 4 、**オ**が 5

ア コンセキ

a コンワクした表情を浮かべる
b ケッコンが付着している
c コンゲン的な問題がある
d 事態がコンメイを極める

イ ケイソク

a 事情をスイソクする
b ソクテン運動
c チームがケッソクする
d ソクセンリョクを求める

ウ ホカン

a 初志カンテツを信条とする
b キンカン楽器を担当する
c ミカンの長編小説を読む
d 行政のカンサを受ける

エ　センサイ

a　センプク期間が長い
b　センザイ一遇のチャンス
c　食物センイを取る
d　センシュ宣誓で大会が始まる

オ　ボウトウ

a　麦わらボウシで日差しを防ぐ
b　メツボウした王国
c　都内ボウショで待ち合わせる
d　ボウケンに出る主人公

問2 傍線部A「写真はその発展を通じて、光の応用範囲を拡張してきた」とあるが、これに関する説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は 6

a 科学技術の発展によって様々な種類の光が使えるようになり、レントゲン写真や赤外線フィルムなど、写真技術が芸術を超えた実用的な分野に転用されているということ。

b 科学技術の発展によって様々な種類の光が使えるようになり、赤外線フィルムやホログラムなど、アートに使える表現技術として幅広く利用されるようになったということ。

c 科学技術の発展によって様々な種類の光が使えるようになり、レントゲンやコピー機など、カメラ以外の機械でも写真のような鮮明な画像が撮れるようになったということ。

d 科学技術の発展によって様々な種類の光が使えるようになり、レントゲン写真やホログラムなど、それまで可視化できなかった対象も描写できる技術を獲得したということ。

e 科学技術の発展によって様々な種類の光が使えるようになり、コピー機やスキャナなど、様々な画像を複製できる機械がますます日常生活に浸透したということ。

問3 空欄 ① に補う言葉として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は 7

a かねて　b よもや　c まさに　d すべからく　e あえて

問4 傍線部B「地球をもうひとつ作り出すほどに成長した」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は 8

a 光による描画と呼ばれた写真技術は、自然の克明な記録から始まり、立体を生み出せる3D技術や位置情報を付与するGPSとも結びついた。これによって奥行きや位置情報を持つ写真のデータが長時間連続的に記録・複製利用されるようになり、地球の複製を作ったと言えるほどの技術になったということ。

b 光による描画と呼ばれた写真技術は、光学カメラによる自然の再現から始まり、奥行きを持つステレオ写真、位置情報を持つグーグルストリートビューへと進化した。これによって地球のすべてをデータ化し、リアルタイムで複製できるようになり、新たな惑星が作れるほどの技術になったということ。

c 光による描画と呼ばれた写真技術は、人間の強い欲望によって立体化の技術を得ることになり、地図製作技術とも結びついて利便性の面でも日常生活に浸透した。これによって記憶の建築物とも言える写真が二十四時間常に編集されるようになり、地球とほとんど変わらない仮想世界を生み出せるほどの技術になったということ。

d 光による描画と呼ばれた写真技術は、2D中心の時代から3D中心の時代へと移り変わり、位置情報も加わって天文学的なデータ量を扱うようになった。これによって写真が複製する対象は平面的な景色から4次元的なイメージへと進化し、地球の理想的なモデルとなるイメージの惑星が作れるほどの技術になったということ。

e 光による描画と呼ばれた写真技術は、目に見えるものの平面的な描写に始まり、目に見えないものや立体を再現する技術を手に入れ、さらに位置情報と共に記録・更新できるようになった。これによって時間の経過も描写できるようになり、過去のデータから未来の地球をシミュレーションできるほどの技術になったということ。

問5 傍線部C「超物質性は、モノがある種のプロセスにあることを示している。」とあるが、ここで筆者はどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は 9

a 筆者は、物質が持つ様々な情報がデータ化され、そのデータの活用が当たり前となった現代において、モノは物体とイメージの二面性を持っていると考え、これを超物質性と名づけた。この超物質性によって、モノが常に他のモノを生み出せる状態にあり、他のモノと無関係に存在できないことを説明できるということ。

b 筆者は、3Dスキャンされたデータをもとに立体的な複製が作られるような現代において、物体とそれについてのイメージはモノの存在様式として同等なものであると考え、これを超物質性と名づけた。この超物質性によって、インターネットがなければ社会生活が成り立たない現代のモノのあり方を説明できるということ。

c 筆者は、データ化が進み、人類が今までに生み出したデータの総量を超えるほどのデータを数時間で生み出す現代において、物体そのものよりもデータ化されたモノのほうが重要になっていると考え、これを超物質性と名づけた。この超物質性によって、データは何か別のモノを生み出す源であると説明できるということ。

d 筆者は、医療技術やセキュリティ産業など、様々な分野で「光による描画」の応用が進む現代において、モノは物体とデータという二重の状態で存在していると考え、これを超物質性と名づけた。この超物質性によって、インターネットを通じてモノがイメージとして取引される時代に特有なモノのあり方を説明できるということ。

e 筆者は、インターネットに常時接続していることが当たり前となった現代において、情報やデータはそのもとになったモノ以上の価値を持つようになったと考え、これを超物質性と名づけた。この超物質性によって、情報やデータを重視する現代では、モノが新たな価値を生み出すための素材に変容したことを説明できるということ。

問6 傍線部D「生命のメカニズムが明らかになればなるほど、生命は無意味になってゆく。」とあるが、「生命は無意味になってゆく」と筆者が言う背景はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は 10

a 科学技術がどれほど発展しても、生に意味はあるのかという問いは人間が自分自身で答えを見つけるしかないにもかかわらず、人間が徹底的にデータ化され進化の過程が解明されることで、あたかも答えが出ているかのように思われ、人間が自分で考えなくなりつつあるということ。

b 科学技術がどれほど発展しても、人間はもって生まれた身体と感覚をたよりに生きるしかないにもかかわらず、人間を解析した生体情報や遺伝情報がデータとして操作できる対象になることで、自分自身の身体と感覚そのものを信じられなくなりつつあるということ。

c 科学技術がどれほど発展しても、人間の存在様式はアートが立てる問いによってしか明確に説明することができないにもかかわらず、生命をモノとして操作できる科学技術によって人間が解析されていくことで、アートが立てる問いの価値が理解されなくなりつつあるということ。

d 科学技術がどれほど発展しても、人間とは何かという問いにおいて、イメージと物質との関係についてデータをもとに考え続けなければならないにもかかわらず、生体情報や遺伝情報が無際限に操作できることで、問いの手がかりになるデータ自体が疑わしくなりつつあるということ。

e 科学技術がどれほど発展しても、人間についての問いにはアートでしか答えられないにもかかわらず、その問いに対して生体情報や遺伝情報の徹底的な解析によって答えようとすることで、絶えず回線に接続された環境で生の意味を感じられない生活を余儀なくされつつあるということ。

問7 傍線部E「彼らにとっても、すでに生命と意味との関係は、もはや明らかではなかったかもしれない」とあるが、これはどういうことか。最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は 11

a 『非物質』展において、古代エジプトのレリーフは生命の成り立ちを神の奇跡として説明していた時代の象徴とされ、科学的に説明する現代の人々の思想とは相容(あいい)れないようだが、女神に魂を与えられる瞬間をレリーフに描いた古代エジプトの人々も、生命の神秘を解き明かそうとしていたかもしれないということ。

b 『非物質』展において、古代エジプトのレリーフは生命の意味が女神によって保証されていた時代の象徴とされ、信仰心をなくせば生命の意味を見失うと現代の人々に警鐘を鳴らすようだが、女神に魂を与えられる瞬間をレリーフに描いた古代エジプトの人々も、信仰が揺らいでいたかもしれないということ。

c 『非物質』展において、古代エジプトのレリーフは生命に神聖な意味があった時代の象徴とされ、現代の人間に生命と意味とのあるべき形を魂として提示しているようだが、女神に魂を与えられる瞬間をレリーフに描いた古代の人々も、身体に宿る生命と意味とを融合させられなくなっていたかもしれないということ。

d 『非物質』展において、古代エジプトのレリーフは生命を女神から授かった不可侵なものとする時代の象徴とされ、生命をモノとして操作する現代の人間を批判するようだが、ミイラによって永遠の生命を得ようとした古代エジプトの人々も、生命を操作できると考える傲慢さをあわせ持っていたかもしれないということ。

e 『非物質』展において、古代エジプトのレリーフは生命の意味は肉体にあると信じられていた時代の象徴とされ、生命の意味をイメージに求める現代の人間をあざ笑うようだが、ミイラによって永遠の生命を得ようとした古代エジプトの人々も、ミイラによって肉体をイメージ化していたかもしれないということ。

問8 次に示すのは、本文の内容について五人の生徒たちが話し合っている場面である。本文の趣旨に**合致しないもの**を、次の**a**～**e**のうちから一つ選べ。解答番号は **12**

a 生徒A――簡単に写真を撮って送受信できるからこそ、きれいな景色をSNSで共有しようと思ったり、その写真を見てその場所へ行こうと思ったりする。写真技術の進歩が私たちの思考や行動に影響しているんだ。

b 生徒B――3Dプリンタの登場で3Dデータの活用の幅が広がったから、3Dの撮影記録も日常的になるだろうね。3D技術は医療にも様々な使い方ができるから、ますます医療技術の進歩が期待されるね。

c 生徒C――グーグルストリートビューは写真を見ているというより自分が景色の中にいるような感じがするけれど、これは写真技術が高度化することで写真と実物の区別が難しくなっていると言えるんだね。

d 生徒D――3Dモデルを自分の分身にしてインターネット上のバーチャル空間で交流するのが普通になったら、生身の自分とバーチャル空間の分身を区別しなくなるかもしれないな。

e 生徒E――個人情報や生体情報、遺伝情報なども、自分のイメージという意味では自分自身なんだ。生身の自分と解析されたデータの両方を大切にすることで、人間が問い続けてきた生きることの意味が分かるよ。

第二問　次の【文章Ⅰ】、【文章Ⅱ】は、いずれも松村圭一郎（まつむらけいいちろう）『うしろめたさの人類学』の一節である。これを読んで、後の問い（**問1～8**）に答えよ。

【文章Ⅰ】

店で商品を購入するとき、金銭との交換が行われる。でも、バレンタインデーにチョコレートを贈るときには、その対価が支払われることはない。好きな人に思い切って、「これ受けとってください」とチョコレートを渡したとき、「え？　いくらだったの？」と財布からお金をとり出されたりしたら、たいへんな屈辱になる。

贈り物をもらう側も、その場では対価を払わずに受けとることが求められる。このチョコレートを「渡す／受けとる」という行為は贈与であって、売買のような商品交換ではない。だから「経済」とは考えられない。

では、ホワイトデーにクッキーのお返しがあるとき、それは「交換」になるのだろうか。この行為も、ふつうは贈与への「返礼」として、商品交換から区別される。たとえほとんど等価のものがやりとりされていても、それは売買とは違う。そう考えられている。

商品交換と贈与を区別しているものはなにか？

フランスの社会学者ピエール・ブルデュは、その区別をつくりだしているのは、モノのやりとりのあいだに差しはさまれた「時間」だと指摘した。

たとえば、チョコレートをもらって、すぐに相手にクッキーを返したとしたら、これは等価なものを取引する経済的な「交換」となる。ところが、そのチョコレートの代金に相当するクッキーを一カ月後に渡したとしても、それは商品交換ではない。返礼という「贈与」の一部とみなされる。このとき、やりとりされるモノの「等価性」は伏せられ、「交換」らしさが消える。

商品交換と贈与を分けているものは時間だけではない。お店でチョコレートを購入したあと、そのチョコレートに値札がついていたら、かならずその値札をはずすだろう。さらに、チョコレートの箱にリボンをつけたり、それらしい包装をしたりして、「贈り物らしさ」を演出するにちがいない。

店の棚にある値札のついたチョコレートは、それが客への「贈り物」でも、店内の「装飾品」でもなく、お金を払って購入すべき「商品」だと、誰も疑わない。でもだからこそ、その商品を購入して、贈り物として人に渡すときには、その「商品らしさ」をきれいにそぎ落として、「贈り物」に仕立てあげなければならない。

なぜ、そんなことが必要になるのか？

ひとつには、ぼくらが「商品／経済」と「贈り物／非経済」をきちんと区別すべきだという「きまり」にとても忠実だからだ。この区別をとおして、世界のリアリティの一端[ア]がかたちづくられているとさえいえる。

そして、それはチョコレートを購入することと、プレゼントとして贈ることが、なんらかの外的な表示（時間差、値札、リボン、包装）でしか区別できないことを示してもいる。

たとえば、[A]バレンタインの日にコンビニの袋に入った板チョコをレシートとともに渡されたとしたら、それがなにを意図しているのか、戸惑ってしまうだろう。でも同じチョコレートがきれいに包装されてリボンがつけられ、メッセージカードなんかが添えられていたら、たとえ中身が同じ商品でも、まったく意味が変わってしまう。ほんの表面的な「印」の違いが、[イ]歴然とした差異を生む。

ぼくらは同じチョコレートが人と人とのあいだでやりとりされることが、どこかで区別しがたい行為だと感じている。だから、わざわざ「商品らしさ」や「贈り物らしさ」を演出しているのだ。

ぼくらは人とのモノのやりとりを、そのつど経済的な行為にしたり、経済とは関係のない行為にしたりしている。「経済化＝商品らしくすること」は、「脱経済化＝贈り物にすること」との対比のなかで実現する。こうやって日々、みんなが一

緒になって「経済／非経済」を区別するという「きまり」を維持しているのだ。

でも、いったいなぜそんな「きまり」が必要なのだろうか？

ぼくらはいろんなモノを人とやりとりしている。言葉や表情なども含めると、つねになにかを与え、受けとりながら生きている。そうしたモノのやりとりには、「商品交換」と「贈与」とを区別する「きまり」があると書いた。

ひとつ注意すべきなのは、そのモノのやりとりにお金が介在すれば、つねに「商品交換」になるわけではない、ということだ。

結婚式のご祝儀や葬儀の香典（こうでん）、お年玉などを想像すれば、わかるだろう。お金でも、特別な演出（祝儀袋／新札／袱紗（ふくさ）／署名）を施すことで贈り物に仕立てあげられる。ふつうは結婚式の受付で、財布からお金を出して渡す人なんていない。

なぜ、わざわざそんな「きまり」を守っているのか？　じつは、この「きまり」をとおして、ぼくらは二種類のモノのやりとりの一方には「なにか」を付け加え、他方からは「なにか」を差し引いている。

それは、「思い」あるいは「感情」と言ってもいいかもしれない。

贈り物である結婚のお祝いは、お金をご祝儀袋に入れてはじめて、「祝福」という思いを込めることができる。と、みんな信じている。

経済的な「交換」の場では、そうした思いや感情はないものとして差し引かれる。マクドナルドの店員の「スマイル」は、けっしてあなたへの好意ではない。そう、みんなわかっている。

経済と非経済との区別は、こうした思いや感情をモノのやりとりに付加したり、除去したりするための装置なのだ。

レジでお金を払って商品を受けとる行為には、なんの思いも込められていない。みんなでそう考えることで、それとは異なる演出がなされた結婚式でのお金のやりとりが、特定の思いや感情を表現する行為となる。

それは、光を感じるために闇が必要なように、どちらが欠けてもいけない。経済の「交換」という脱感情化された領域

があってはじめて、「贈与」に込められた感情を際立たせることができる。だからバレンタインのチョコで思いを伝えるためには、「商品」とは異なる「贈り物」にすることが不可欠なのだ。

B この区別は、人と人との関係を意味づける役割を果たしている。

【文章Ⅱ】

最近アディス(注)でよく滞在しているオリンピアの路上にも、何人か「常連」の物乞いがいる。このあたりは、大通り沿いにビルが建ち並び、おしゃれな店も多い地区だ。

その歩道で、ひとりの高齢の老婆がよく物乞いをしている。浅黒い顔に刻まれた深い皺からは、かなりの歳を重ねているように見える。足腰が弱っていて、ゆっくりとしか歩けない。だから歩道の中央に突っ立ったまま、道行く人に手を突き出すようにして、お金をせがんでいる。

歩いている人は、たいてい不意に腕や胸のあたりを手で突かれる格好になる。若い男性などは、不機嫌そうに振り返って、睨みつけたりする。でもほとんどの人は、その老婆の姿を目のあたりにすると、仕方ないなという顔になる。そしてポケットから小銭を取り出し、手渡している。

老婆は、当然のように無言でお金を受けとると、また次の人に手を突き出す。いままで、この老婆が物乞いに失敗したのを見たことがない。

エチオピアの人びとは、よく物乞いにお金を渡している。きっとぼくらのほうが豊かなのに、そんな金持ちの外国人が与えずに、あまりもたないエチオピア人が分け与えている。その姿に、ふと気づかされる。

いかにぼくらが「交換のモード」に縛られているのかと。

いまの日本の社会では、商品交換が幅を［　①　］。さまざまなモノのやりとりが、しだいに交換のモードに繰り入れられてきた。それは、面倒な贈与を回避し、自分だけの利益を確保することを可能にする。厄介な思いや感情に振り回されることもなくなる。

しかし、c この交換は、人間の大切な能力を覆い隠してしまう。

ぼくらは他者と対面すると、かならずなんらかの思いを抱く。無意識のうちに他者の感情や欲望に自己の思いを共鳴させている。泣いている赤ちゃんを目の前にすると、なんだか自分まで悲しくなってくる。なにかしてあげねば、という気になる。人がタンスの角などに足の小指をぶつけるのを見ると、その「痛み」はひとごとには思えない。思わず「あいたた」と声が出てしまう。

この「共感」が、コミュニケーションを可能にする基盤でもある。

身体の弱った老婆を目のあたりにして、なにも感じないという人はいないだろう。でも「交換」のモードには、そんな共感を抑え込む力がある。

物乞いのおばあさんがみんなから小銭をもらうのは、彼女だってどこかでお金を商品と交換する必要があるからだ。どんなに貧しいおばあさんでも、スーパーに行って商品をタダでくださいと言ってもらえるわけではない。商品交換の場では、そのおばあさんが「貧しそう」とか、「歳をとっている」とか、「身体が弱っている」なんて共感を生じさせる情報は余計なものとして除去される。誰もが透明な存在として感情や思いなしに交換することが求められる。それはエチオピアでも同じだ。

でも多くの日本人は道端で物乞いの老婆を目にしたときも、この交換のモードをもちだしてしまう。いろんな共感を引き起こしそうな表情とか、身なりとかを見なかったことにする。

同時にそれは、ぼくらがたんに日本に生まれたという理由で彼らより豊かな生活をしているという「うしろめたさ」を

覆い隠す。そして物乞いになにも渡さないことを正当化する。交換のモードでは、モノを受けとらないかぎり、与える理由はないのだから。心にわきあがる感情に従う必要はないのだから。

「みんなに与えられるわけではない」。そう思うかもしれない。でも、おそらく金額そのものが問題ではない。道で出会う物乞いにそのつど一ブル（約五円）ほど渡したところで、たいした額にはならない。彼らはそれくらいでも、こころよく「神のご加護を」と言って受けとってくれる。

商品交換のモードが共感を抑圧し、面倒な贈与と対価のない不完全な交換を回避する便法となる。ぼくらはその「きまり」に従っただけでなにも悪くない。そう自分を納得させている。

あるいは「与えることは彼らのためにならない」と言うかもしれない。これだって同じ正当化にすぎない。ためになるかどうかは、そもそも与える側が決められるものではないからだ。いろんな理屈をつけて最初に生じたはずの「与えずにはいられない」という共感を抑圧している。

（注）アディス――エチオピア中央部に位置する同国の首都。アディスアベバ。後述のオリンピアは、ホテルが多くある地区。

問1 傍線部**ア**～**ウ**の本文中におけることばの意味として最も適当なものを、次の各群の**a**～**d**のうちから、それぞれ一つ選べ。解答番号は**ア**が 13 、**イ**が 14 、**ウ**が 15

ア 一端

- **a** 典型的なもののとらえ方
- **b** 中心からはずれたところ
- **c** 独創的なひとつの見方
- **d** 全体の中のある部分

イ 歴然とした

- **a** 明瞭でまぎれのない
- **b** 時間とともに大きな
- **c** 見た目ではわからない
- **d** 実質的に意味のある

ウ 不意に

- **a** 油断すると
- **b** 不愉快にも
- **c** 即座に
- **d** 思いがけず

問2 空欄 ① に補うことばとして最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は 16

a　広げている　　b　取っている　　c　割いている　　d　要している　　e　利かせている

問3 傍線部A「バレンタインの日にコンビニの袋に入った板チョコをレシートとともに渡されたとしたら、それがなにを意図しているのか、戸惑ってしまうだろう」とあるが、筆者はなぜこのように考えるのか。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は 17

a チョコレートを受けとったその場で対価を払わず、一カ月後にクッキーを渡すという行為は一般的に「贈与」とみなせるが、レシートに示された代金に相当するクッキーを渡してしまうと、レシートによって「等価性」が強調されて経済的な「交換」とみなすことも可能となり、「贈与」と「交換」の線引きが難しくなるから。

b 「商品／経済」と「贈り物／非経済」を区別するのはモノのやりとりにおける「時間」性だが、レシートとともに手渡されるコンビニの袋に入ったチョコレートは、チョコレートの箱にリボンをつけたり、それらしい包装をしたりするといった「時間」性の演出が認められず、「贈り物」であると感じることができないから。

c 店の棚にある値札のついたチョコレートは即座に「商品」だと認められるが、レシートとともに手渡されるコンビニの袋に入ったチョコレートは、「商品らしさ」をきれいにそぎ落として「贈り物」に仕立てあげられたものとは認められず、「商品」と「贈り物」を区別する「きまり」のあいまいさを突きつけてくるから。

d コンビニで購入されたチョコレートであっても、贈られるのがバレンタインの日で包装などの外的な表示があれば「贈り物」とみなすこともできるが、一方で、やりとりされるモノは実質的な意味合いとして棚に並べられている商品と「等価」なモノでしかなく、受け取る側はモノがもっている意味の二重性に困惑してしまうから。

e 「商品／経済」と「贈り物／非経済」の区別について、時間や演出の有無をとおしてどちらに入るのかという意味づけをしているが、レシートとともに手渡されるコンビニの袋に入ったチョコレートは、「きまり」にしたがった線引きができず、「贈与」と「交換」のどちらとして受け取るべきなのか分からなくなってしまうから。

問4 傍線部B「この区別は、人と人との関係を意味づける役割を果たしている。」とあるが、それはどういうことか。本文を踏まえた具体的な説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は 18

a 今の日本社会では、モノのやりとりの際に「思い」や「感情」を付け加えたり差し引いたりしながらそのつど「商品交換」と「贈与」の区別をしているが、同居する家族など多くの時間を共有している関係ではこうした区別が不明瞭になっており、「経済／非経済」の「きまり」が存在していないということ。

b 今の日本社会では、大多数の人が「商品交換」と「贈与」とを区別して行動しており、こうしたモノのやりとりにおける区別に自覚的であることによって、結婚式などにおいて単に現金を渡すという「経済」的行為であっても、特定の思いを付与する「祝福」とみなすことができているということ。

c 今の日本社会は、モノをやりとりする際に「商品交換」と「贈与」とを区別する「きまり」が存在しており、友だちに相談した際のアドバイスが無償の行為として「脱経済化」されることで親密な関係が確認できるように、モノのやりとりをめぐる区別をとおして人間の関係性が形づくられているということ。

d 今の日本社会は、人との交流の過程で常に何かを与えたり受けとったりしながら生きており、モノのやりとりに介在する言葉や表情などには「思い」や「感情」が含まれているため、「スマイル」の「交換」といった見た目にわかりやすい好意が人間関係の構築に重要な役割を果たしているということ。

e 今の日本社会では、モノのやりとりにおいて「商品交換」と「贈与」とを区別する「きまり」が維持されているが、今後は「贈与」を基盤とした「思い」や「感情」を大切にする社会に転換していくことによって、様々な人々とより親密な人間関係を築き上げていく必要があるということ。

問5 傍線部C「この交換は、人間の大切な能力を覆い隠してしまう」とあるが、それはどういうことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は 19

a 支払ったお金に対してこれに相当する対価を求めるという商品交換のモードにとらわれると、面倒な贈与や不完全な交換を避けようという思考になるだけでなく、他者に対して心にわきあがる感情や共感を抑え込んでしまうということ。

b お金のやりとりを不道徳に感じてしまう商品交換の考え方が主流になると、物乞いにお金を分け与えるといったことに違和感を抱くようになるだけでなく、贈り物に込められた思いや感情までも理解できなくなってしまうということ。

c さまざまなモノのやりとりにおいて感情を排除する交換のモードが浸透すると、共感を抑制したうえで他者の感情や思いを冷静に分析することが可能となって人間関係に煩わされることはなくなるが、一方で人情の機微は理解できなくなるということ。

d 対価を求めることを権利とする交換のモードに支配されると、貧しい人に対しても何らかの対価を求めることを当然と考え、日本に生まれたというだけで豊かな生活をしている者には、その分だけ課せられた責任があることに気付けなくなるということ。

e 経済社会のなかに交換のモードが十分に行き渡らないと、他者の感情や欲望に共鳴する自己を抑え込む力が弱くなってしまうため、商品交換の場においても「非経済」の論理を持ち込み、贈り物を期待するという甘えが生じるようになるということ。

問6 【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、どのように文章が展開しているか。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は 20

a 「商品／経済」と「贈り物／非経済」を区別している日本社会について説明したうえで、「経済」と「非経済」を区別する意識が薄いエチオピア社会の課題を指摘し、経済が社会に及ぼす影響について論じている。

b 「経済／非経済」の区別によって人間関係を築く日本社会について説明したうえで、素朴な「共感」にもとづくコミュニケーションを基盤とするエチオピア社会を紹介し、多様な人間関係のあり方について検討している。

c 「商品／経済」と「贈り物／非経済」の区別に忠実な日本社会の現状とその背景を説明したうえで、エチオピア社会の物乞い文化と「共感」について論じ、交換のモードが定着している日本社会のあり方を相対化している。

d 「経済／非経済」を区別するという「きまり」を維持している今の日本社会の功罪を述べたうえで、「共感」を重視するエチオピア社会の特徴を指摘し、「経済」と「贈与」に関する両者の相違点を提示している。

e 「経済化」と「脱経済化」との対比が明瞭な日本社会の現状と課題について述べたうえで、「交換」のモードが浸透していないエチオピア社会の特徴に着目し、両者を融合した理想の社会のあり方を模索している。

問7 【文章Ⅰ】の表現に関する説明として**適当でないもの**を、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は 21

a 「商品交換と贈与を区別しているものはなにか？」、「なぜ、そんなことが必要になるのか？」など、疑問文を用いて読者に問いかけながら話を進めることで、文章の論点と展開をわかりやすく示している。

b 商品交換と贈与を区別しているものについて、フランスの社会学者ピエール・ブルデュが提示した「時間」を着眼点とし、具体例を示しながら商品交換と贈与におけるモノの等価性について検討している。

c バレンタインデー、結婚式、マクドナルドなどといった身近な題材をもとに、ユーモアを交えながら贈り物と商品のもつ違いについて説明することで、読者が体験に即して内容を理解できるようにしている。

d 一般的に用いられる「私たち」ではなく「ぼくら」という言葉を用いることによって、筆者の体験談を身近なものとして感じさせ、個別性のある出来事を日本社会における普遍的な出来事として印象づけている。

e 商品交換と贈与との区別に関して、筆者は「と、みんな信じている」、「そう、みんなわかっている」などと表現することで、「経済／非経済」の「きまり」が大衆の意識によって維持されているという点を強調している。

問8 次に示すのは、この文章を読んだ後に、教師の指示を受けて五人の生徒が話し合っている場面である。本文の趣旨に**合致しないもの**を、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は 22

教師――『うしろめたさの人類学』の終章で、筆者は、次のように述べています。本文の内容と合わせて、筆者が伝えたいことについて考えてみましょう。

まず、知らないうちに目を背け、いろんな理由をつけて不均衡を正当化していることに自覚的になること。そして、ぼくらのなかの「うしろめたさ」を起動しやすい状態にすること。人との格差に対してわきあがる「うしろめたさ」という自責の感情は、公平さを取り戻す動きを活性化させる。そこに、ある種の倫理観が宿る。（中略）

震災後、冷たい雨のなか、がれきを拾い集める人たちの姿をテレビで見て、快適な部屋でなにもしていない自分にうしろめたさを感じ、被災地に義援金を送った、という人もいるだろう。国会前でデモが続いているとき、若者が自分の言葉で政治について語る姿を見て、自分はなにをやっているんだ、と反省を迫られた人もいるだろう（私です）。

こうして、倫理性は「うしろめたさ」を介して感染していく。目を背けていた現実への認識を揺さぶられることで、心と身体に刻まれている公平さへの希求が、いろんな場所で次つぎと起動しはじめる。

a　生徒Ａ――例えば、電車でご高齢の方が立っていて、自分の隣に座っていた人がすっと席を譲ると、自分がすんなりと行動に移せなかったことに「うしろめたさ」を感じるよね。【文章Ⅱ】で筆者は、他者の痛みに「共感」する能力を誰もが持っているように、「うしろめたさ」を感じる力もみんなが持っていると考えているんだよね。

b　生徒Ｂ――ただ、今の日本社会で私たちは人とのモノのやりとりを、「商品と経済」と「贈り物と非経済」という形で区別している。こうした「きまり」が当たり前になり、交換のモードに縛られてしまうことで「うしろめたさ」を感じにくくなると筆者はとらえているようだ。

c　生徒Ｃ――日本と違ってエチオピアは、「共感」を重要視する社会だから、モノのやりとりに関しては「贈り物」と「商品」とを区別する意識はあまりないんだよね。贈与と交換に差異を認めないのは不思議だけど、交換関係に気を遣わず、代償を求めない社会はある意味うらやましく感じられる。

d　生徒Ｄ――一般的に「仕事」は給与をもらうので「商品交換」に属するよね。もちろん仕事にはそれにふさわしい報酬が必要だけれど、「経済と非経済」の「きまり」が必ずしもあてはまらないボランティア活動に参加する経験を積み重ねていくと、交換のモードに縛られない契機になるかもしれないね。

e　生徒Ｅ――今は「経済と非経済」を区別するという「きまり」に忠実な社会だけど、そうした「きまり」に従っていることに自覚的になって「贈与」や「交換」について見つめ直し、世界の捉え方を少しでも変えられれば、「うしろめたさ」を起動しやすい状態にすることができるかもしれないよね。